



「体験の風をおこそう」実行委員会 主催事業

令和2年度「ちっちゃい探検隊【特別企画】」

～船上山の大冒険!かくされた宝を見つけ出せ!～ 実施報告書



I 事業の概要

1 期日

令和2年10月31日(土)

2 日程

9:00	受付
9:30	出会いのつどい
10:00	レクリエーション
11:00	「たからものを 入れる カゴをつくろう!」(クラフト)
12:00	昼食
13:00	「ぼうけんに でかけよう!」(野外オリエンテーリング)
14:30	「たからもの ありかを としあかせ!」(暗号解読)
15:00	「せんじょうさんの たからもの しぜんの めぐみを いただきます」(おやつタイム)
15:20	感想記入
16:00	別れのつどい
16:30	解散

3 趣旨

- ・ 親元を離れ、様々な活動を主体的に行うことで、自分でできることは自分でする力をつける。
- ・ 初めて会う人たちとの活動や生活を通して、進んで友だちをつくったり協力したりしようとする力を養う。
- ・ 船上山の豊かな自然の中で活動を行い、自然への興味関心を高める。

4 対象 小学校1年生～3年生(募集定員24名)

5 応募者数 176名

6 参加費 900円(食費、保険代、活動費など)

7 学生ボランティア 感染症拡大防止のため、募集なし

II 実施状況

■活動の様子 <天候 晴れ>

24名の元気な子どもたちが船上山にやってきた。受付での検温後、密を避けるため、体育館で距離を取りながら出会いのつどいを行った。身体的な距離が空いていることもあり、初めは子ども同士ぎこちなさを感じられたが、レクリエーションをする中で、徐々に緊張がほぐれ、笑顔がみられるようになった。

班ごとに自己紹介を兼ねたゲームを終えた後、センジョウ様から船上山に伝わる宝物の話を聞いた子どもたちは、クラフト活動として、宝物を持ち帰るためのかご作りに挑戦した。ちょうどハロウィンの時期でもあり、牛乳パックを利用したカボチャのかごを作成した。指導員のサポートもあり、子どもたちはそれぞれ表情豊かなカボチャのかごを作り上げた。



ハロウィン特別メニューの昼食を食べて元気いっぱいになった後、子どもたちは宝物の手がかりを示した地図を手に、野外オリエンテーリングへ出発した。全6か所のミッションをクリアしながら、宝物のありかを示す暗号のかけらを手に入れていった。時間も限られており、達成するのが難しいミッションもあったが、子どもたちは力を合わせて取り組んでいた。



4班すべての暗号のかけらを合わせると、「広場の白い倉庫の中」という言葉が完成した。倉庫の中から宝箱を発見すると、子どもたちからは歓声が上がった。宝箱の中にはサツマイモがあり、船上山の落ち葉を使って焼き芋を作った。出来立ての焼き芋を、みんな嬉しそうに食べていた。



別れのつどいの後、子どもたちは船上山バッジと焼き芋をお土産に持ち、迎えに來られた保護者の方と一緒に笑顔で帰っていった。

Ⅲ 総括

1 参加者の感想(抜粋)

- ・ ちっちゃい探検隊でたのしかったことは、牛にゆうパックでかぼちゃのいれものを作ったことです。ほかに楽しかったことは、宝のヒントをもらうためのゲームです。あとは、宝の場所をかいどくするのも楽しかったです。またさんかしたいです。
- ・ 今日、船上山をまわっていろんなことができました。かぼちゃのかごづくりや、ゲームをして楽しかったです。探検隊をしてあん号をといたり、たからを見つけたりできて、またいってみたいなと思いました。葉をつかって火をつけていたのでびっくりしました。
- ・ きょうちっちゃいたんけんたいをしました。はんのみんなともだちになってよかったです。みんなとハロウィンのかごがつくれてよかったです。いちばんたのしかったのはボールをはこぶものです。じかんがかかったけど、さいごまでできてよかったです。またいきたいです。



2 成果

- ・ 24名の募集に対し、176名という多くの応募があった。このような社会情勢の中でもこの主催事業に対する期待と関心を感じることができた。
- ・ 少しでも密を避けるために、全体ではなく班単位での活動を多く取り入れたこともあり、子どもたちが班内で協力する姿が多く見られ、友だちとのかかわりを持つことができた。
- ・ 日帰りという短い時間ではあったが、子どもたちからは「楽しかった」、「また来たい」という感想を多く聞くことができた。
- ・ コロナ禍の中で参加者の方に安心して参加いただくために必要な準備や対応について、所内で十分検討し当日を迎えることができた。今回講じた感染症対策は、今後の主催事業にも生かされると感じている。



3 課題

- ・ 柔軟な企画立案や子どもたちの安全確保の面から、改めて学生ボランティアの力は大きいものだと感じた。社会情勢次第ではあるが、今後可能な限り学生ボランティアの力を借りて実施していきたい。